



昔々、医療が発展していなかった時代は、祈りや  
拜むことで災厄を逃れようとしていただろう。現  
代のコロナ禍でもアマビエを描くおまじないが流  
行していたり、正月には家内安全・身体健康を願  
い、寺社仏閣を参詣する人も少なくない。

かつては地域によって様々な祈りの形があり、日  
常の中に根付いていたはずだ。最上町を散策して  
いると、あちらこちらに小さなお稲荷様や、山神  
社などが点在していることに気付く。いったいど  
んな経緯でそこに建てられたのか調べようとして  
いた時、佐藤義則さんという方の著書と出会った。  
かなり古いものだが、読み進めていくと良い意味  
でツツコミどころが満載で面白いし、昭和初期の  
最上町の暮らしが思い浮かぶ豊かな表現で記され  
ている。

紹介したいネタが満載だが、今回はその中から  
「からだ」に関するものを取り上げてみた。ご存  
知の方も多いかもしれないが、よそから嫁いでき  
た私にはとても新鮮だし、ぜひ実践してみたい。  
実際にそこに行つて治つたという人の話をよく耳  
にするので、ただの迷信では片付けられない。

また、こういった伝承は、時が経つにつれ風化していつてしまうだろう。東法田の病送りは、行事として残っている貴重なものであるが、この度のコロナの影響で今年中止してしまったそうだ。人手や、材料の確保など複合的に継続が難しくなっていると聞くが、ぜひ来年以降も続いて欲しいと切に願う。そのため何かお手伝い出来ることがあればお声がけいただきたい。

伝統行事は無形文化財として貴重なのはもちろんだが、地域の結びつきを作る役割がある。一つの地域だけで守ることが難しければ、地域の垣根を超えて関わることは出来ないだろうか。

目に見えないものへの畏れや敬意は、自然に生かされている人間が決して忘れてはいけないこと。未来を生きる子どもたちに何をどのように伝え、残していくか、私達の世代が真剣に考えていかなければならない時期に来ている。

2020年7月22日発行

編集・最上町地域おこし協力隊 山崎香菜子

情報提供や山崎とお話したい方はご連絡ください

電話080-3256-1134

メール hayakawamiyage@gmail.com

### 病送り

東法田の窓塞などで現在も行われている風習で、日常生活に脅威を与える災厄や疫病を集落の外に送り出す意味がある。7月の第一日曜に持ち寄ったワラで等身大の人形を作り、そこに各家庭で搗いた餅や赤飯を朴の葉に包んだものを結びつけ、集落の上から下へ運び、藪に捨てる。家ごとにも小さなワラ人形を作り家の前に吊るす。上満沢でも背坂峠まで同様の病送りがあったそうだ。（場所：窓塞、仲神、沢原、横川）

### 百日咳

幼い子供がかかると重症化する百日咳が流行ると、母親たちは荷渡神社へお参りに行く。荷渡がニワトリ権現様と呼ばれるようになり、百日咳をこの辺りでは「トリシャブキ」ということから、それにあやかっただものだと考えられている。（場所：大堀の国道47号線を新庄方面へ進み右側の山の斜面）

### イボ

体にイボがある人は、大天馬様（黒澤神社）の境内にあるイボビッキ（がま蛙）をこすって拝むと治る。蛙は水の神である大天馬様のお供なんだとか。（場所：黒沢地区入口付近）

### 咳

笹森にある地藏様を咳の婆様といって、豆粉（きなこ？）をあげて咳しずめを祈る。これは笹森関所のセキが咳となったものだろう。（場所：国道47号線を富沢から鳴子方面に進み笹森集落入口左側）

### 虫歯

神社ではないのだが、木が一本生えているこんもりした土塚があり、五輪様と呼ぶそうだ。石神に炒り豆を年の数ほどあげて、「この豆、芽ぶくまで歯痛むな」といって拝み、後ろ向きで降りるといいらしい。（場所：下小路のはずれにある最上三栄自動車さんの裏）

### 風邪

寒の入り（1月5日頃）には、ニンニクと小豆3粒を食べると、風邪を引かないと言われている。温まるものと、冷えるものを食べると体が強くなるそうだ。

### 眼病

瀬見温泉の湯前神社は弁慶が義経の子、亀若丸の産湯を掘り当てたことでまつられたのは有名だが、社の前に目洗い清水が湧いていて、その神水で目を洗うと、どんな眼病もたちどころに良くなる。（場所：瀬見温泉湯前神社）

### 夜泣き

夜泣き癖のある赤ちゃんがいたら、夜間近くの稲荷様を三社まわって供え物をあげると泣き止む。お腹を空かせたキツネ様が赤ちゃんにいたずらして食べ物をねだっているためだとか。

※上記は民間信仰であり、医学的根拠に基づいたものではありません。※いずれも、重症の病は病院を必ず受診してください。※畑などの私有地には立ち入り不要ようお気をつけください。